

新人研修のためのプロジェクト管理ツール導入

伊藤康広

工学系技術支援室 情報通信技術系

はじめに

新人研修は系全体で業務分担をできるようにするために、重要な業務であると考えられる。そのため、研修指導のメンバーのみならず、関係者全員が研修の状況が見えるようになっていくことが望ましい。従来は新人が個別に Excel シートで進捗管理をしてきたため、そのファイルが定期的に公開されない限り、新人から離れた場所にいる関係者は進捗を把握することが難しい状態になるという問題があった。

そこで、今回は Redmine というプロジェクト管理のための Web システムを導入して新人研修に適用し、従来の研修の進め方を改善するために行った取組の内容について紹介する。

1. プロジェクト管理ツール Redmine について

プロジェクト管理ツールとは、人やドキュメント、スケジュールなど、プロジェクト全体を一括管理するためのツールである。今回は次の基準をクリアするものとして Redmine を採用した。

- 無料で使える
 - ▶ 限られた予算の下でも利用できるツールが望ましいため
- ガントチャートが使える
 - ▶ 同時進行している複数の進捗状況を一目で把握したいため
- Web で操作できる
 - ▶ 研修が行われている場所から離れていても、状況を把握することが容易になるため
- 通信が学内で完結する
 - ▶ 大学外に通信が出ていくのはセキュリティ上好ましくないため
- メンテナンスされている
 - ▶ バグがあった場合に対応してほしいため
- 日本語での情報が多い
 - ▶ トラブル発生時に調査を行いやすくするため

Redmine ではチケット（図 1）を中心としたプロジェクト管理を行うことになる。チケットはプロジェクトにおける 1 つの課題に相当する。チケットを更新し、ガントチャートでチケットの消化の程度が可視化されることによって、プロジェクトメンバーは進捗を把握することが容易になる（図 2）。

新しいチケット

トラッカー * タスク プライベート

題名 *

説明 B I U S C H1 H2 H3 pre

ステータス * 新規

優先度 * 通常

担当者

対象バージョン

親子チケット

開始日 2016-01-13

期日

予定工数 時間

進捗率 0 %

ファイル ファイル選択 選択されていません (サイズの上限: 10 MB)

チケットのウォッチャー

ウォッチャーを検索して追加

作成 連続作成 プレビュー

図 1 チケット登録画面 (注: チケットのウォッチャーの名前は伏せています)



図 2 Redmine のガントチャート (注: 業務名は一部伏せています)

2. Redmine のインストールと利用前のカスタマイズ

<http://blog.redmine.jp/> にある記事を参考に、Redmine をインストールした。手順がすべて記載されているため、特に問題なくインストールができた。なお、後日マイナーバージョンアップも行ったが、その際には <http://redmine.jp/guide/RedmineUpgrade/> が参考になった。

表 1 最初にシステムを構築した時点での環境

ソフトウェアの種類	利用したバージョン
OS	CentOS 6.6
データベース	MySQL 5.1
Ruby	2.1.5
Ruby on Rails	3.2.19
Redmine	2.6.0
Web サーバ	Apache 2.2

インストール直後の Redmine の状態は、ソフトウェア開発を念頭に置いたものであるため、カスタマイズの必要があった。新人研修の用途に合わせるため、Redmine にシステム管理者としてログインし、以下に挙げる変更を行った。

- トラッカーの変更
 - トラッカーはチケットの種類を表すものである。インストール直後は「バグ」、「機能」、「サポート」がチケット作成時に選択可能となっているが、そのままでは新人研修に使えないので「タスク」をトラッカーに追加し、チケット登録時に指定できるようにした（図 1は変更済の状態）。
- アカウントの作成
 - 新人と研修内容を確認する情報通信技術系メンバーの計 6 人を登録した。
- ロール（役割）の変更
 - ロールを利用することで、プロジェクトにおける権限を設定できる。インストール直後は（プロジェクトの）管理者、（ソフトウェアの）開発者、（バグや要望の）報告者が用意されている。今回は研修管理者と研修受講者というロールを作成して、それぞれに対して権限をカスタマイズした。例えば、研修管理者については、チケットが割り振られないなどの設定を行っている。
- セキュリティ対策
 - 初期状態ではログインしなくてもプロジェクトが閲覧できたので、それを禁止した。
- プラグインの導入
 - ガントチャートの初期状態は 1 年の何週目かという数値が表示されているが、馴染みのない表記なので、日付で表示するためのプラグイン（Redmine Gantt With Date plugin、https://github.com/vividtone/redmine_gantt_with_date よりダウンロード可能）を導入した。



図 3 プラグイン導入による日付表示の変更

- メール通知設定

- ▶ チケットの登録・更新だけでなく、「文書の追加」が発生した際にもメールが飛ぶように設定した。

また、サーバに **SSH** でログインして次の設定を行った。

- リマインダ機能の追加
 - ▶ 作業漏れを防ぐことを目的に、**cron** を利用して 1 日 1 回決まった時間に、期限の近い課題を一覧にしてメールで飛ばすように設定した。

3. プロジェクト（新人研修 2015）の運用ルール

ここでは、プロジェクトを作成した後の運用ルールについて紹介する。

- 研修内容を Wiki に記述した
 - ▶ プロジェクト内の Wiki であれば、研修カリキュラムが変更となった場合でも、研修管理者が容易に変更できるため。
- Web や DNS、Mail など各サーバの構築を 1 つのバージョンとみなした
 - ▶ 通常のソフトウェア開発ではバージョンを用意し、バージョンごとに開発の内容を分けている。今回は 1 種類のサーバ構築を 1 つのバージョンとみなし、それが完了したら次のバージョンに進めるという形式にした。図 1 の「対象バージョン」では、チケットの属するバージョンを設定することが可能である。
- 研修参加者にはプロジェクトのすべての通知が来るように設定した
 - ▶ チケットの更新や週報のアップロードに対して、メールが自動的に飛ぶようになり、システムにログインしなくても研修の進捗状況を把握することが可能となった。

4. プロジェクトにおける新人研修の進め方

研修課題の進め方と各段階における注意点を示す。課題となるチケットを登録してから、研修管理者側で繰り返しチェックを行える仕組みとなっている。

- 1) 研修管理者が課題となるチケットを登録する
 - ▶ チケットを作成するときには、1 つの課題を終えるのに、最長でも 1 週間程度になるようにした。これは研修受講者がどの程度まで進めたか進捗率を申告する際に、どの程度まで進んでいるかを判断しやすくするためである。
- 2) 研修受講者は日報としてチケットを 1 つ以上更新する
 - ▶ 一日の作業が終わったら、作業内容をチケットに記入し、どの程度できているかを自己申告する。進捗なしという状態であっても、研修管理者がアドバイスをしやすくなるよう、研修中に試したことを書いてもらうという方針とした。チケットを登録後、チケットを編集する画面で進捗率を変更することによって、進捗状況を申告することが可能になる。編集の際には、**Done**（やったこと）、**Memo**（メモ）に分けて記述してもらうことにした。やることを忘れないように、研修管理者だけでなく研修受講者もチケットを登録することもできるようにした。
- 3) 研修受講者は週の最後に週報を提出する
 - ▶ 日報は **Web** のフォームに入力するものであり、長文での報告には向かない。そこで、週報では具体的に行ったこと（サーバ構築であれば、設定ファイルの初期状態からの差分やスクリーンショットなど）を **Word** ファイルなどに記述してもらい、**Redmine**

の文書管理画面からアップロードしてもらおうようにした。アップロードすると「文書の追加」となるため、研修メンバー全員にファイルがアップロードされたことについてメールでの通知が行われる。翌週の最初の日、研修管理者は週報を読んで研修受講者にフィードバックし、課題が新たに発生すればチケットを追加することにした。

- 4) 研修受講者と研修管理者が集まって、2週間に1回程度の頻度で研修報告会を行う
 - ▶ 研修報告会は主に2つの目的で実施した。1つは研修受講者の資料作成とプレゼンテーションの練習である。もう1つは、大勢で目を通すことによって、研修に足りない項目の有無を確認しつつ、配属予定先に合わせた課題を追加するためである。

5. まとめ

Redmine に用意されている仕組みを用いることで、メールを書くためのコストを下げ、離れた場所にいる関係者にも報告が簡単にできる環境を構築することができた。また、1日、1週間、2週間という複数の期間で研修管理者による定期的な確認を入れたため、研修が進まない場合に、問題を早期に把握することが可能となった。

プロジェクトは終わった後でも記録として残しておけるため、来年度以降の研修にも引き継げる資料として役立つものと考えられる。今後は新人研修のみならず、Redmine とバージョン管理ツールの連携など、ソフトウェア開発における利用方法を検討していきたい。

参考文献

- 1) 入門 Redmine 第4版、前田 剛 著、秀和システム
- 2) Redmine 実践ガイド、株式会社 アジャイルウェア 著、ソシム